



第2号

発行

広島市外五日市町三宅

広島工業大学「五三會」

代表 菅原 辰幸

## おいのくりごと

教官 山本 堯亮

五三會の皆様お元気ですか、明けましてお目出度うございます。昭和50年は大変区切りのよい数字の年で何か好いことがと期待しているのですが社会状況一般の現実には願望とは反対に非常にきびしい容相で新年の幕を上げることになりました。

昨年末には、ついに全国の求人倍率は1.0以下に落ちこみ、工大建築学科の就職状況についても、昨年度は不況かげり含みの中で何とか全員就職の実績をあげたのに今年度は1月現在で75%、他学科の平均90%を大きく下廻っております。しかし新聞、テレビ等で報道されている就職内定取消、自宅待機(事務系統に多いようです)のないのはせめてもの幸です。

一寸、昔の話になりますが50年前の大正15年(昭和元年)は、その後の社会情報化に大きな役割を果たしたラジオ放送が開始された年です。しかし、それから数年間の社会、経済情勢は現在のそれと似ているので何かにつけて比較されているのは皆さんが知っておられるとおりです。現在もそうですが当時の不景気も世界的なもので、ついには昭和4年(1929年)ニューヨークの株式市場で致命的な大暴落がおこり全世界の経済機構を大混乱に落しつけました。日本でも金融大恐慌のため台湾銀行はじめ各地の銀行が貯金者の取付さきで休業状態になりモラトリアム(支払猶予令)が発令され、当時(昭和4年)の浜口内閣は財政緊縮政策(金融引締め)をとることになり大変な不景気にみまわれ各企業に人員整理、労働争議、倒産が続出、その結果、就職難、失業地獄になり、都市・農村を含めて全国的な社会不安を引きおこしました。このような世相は軍備縮小のため萎縮をよぎなくされていた軍部に勢力拡張の絶好のチャンスを与えることになり満洲事変(昭和6年)、満洲国建国(昭和7年)から5.15事件(昭和7年)、2.26事件(昭和11年)等の軍部クーデター、日支事変(昭和12年)につづき、ついに第2次世界戦争に突入することになりました。官吏減俸令が実施され、米の大豊作(昭和6年)で米価が大暴落して米1升(1.5kg)がタバコ1個と同価格だと騒がれたかと思うと翌年は冷害で大凶作になり農村は混乱、恐慌状態になり娘の身売りが社会問題になったのもこの頃のことです。なお、当時のタバコは1個平均8~9銭、サラリーマンの初任給与の平均ベースは50~55円くらいでした。

敗戦後のインフレ不況が朝鮮動乱の特需ブームでひと息ついた後、なべ底景気といはれた32~33年以後は池田内閣(35年)の所得倍増政策で経済高度成長の波にのり、途中多少の落ち込みはあったものの、好況に比例する物価高と公害を道づれにして空前の伸び率を続けた10数年

間の泰平ムードは48年秋の石油ショックで一拳に混乱状態になり、この混乱がおさまった後に残ったものは悪性インフレという重症で、いわゆる狂乱物価時代になります。あわてた政府の総需要抑制、金融引締め等のカンフル注射は生産コスト・製品価格の急上昇、輸出・販売不振、滞貨増大、生産部門縮小、操業短縮、レイオフ、首切り、倒産続出などの副作用となり、ひいては工大就職戦線にもツケが廻って来ました。報道によりますと今年1月の失業者数は70万をこえ数ヶ月後には100万になるとのことでありますが、これは史上最高といはれた昭和初期の総人口6000万に対する失業者40万を上廻るものです。

うとうとしいことを長々と述べましたが、人間誰れしも一生のうちには此の様な世相の変転に遭遇するもので、しかも、その現象は起伏、周期のようなものがあって簡単に変わらないのは皆さんもご存じのとおりです。物ごとを変えてゆくには時間がかかり早急に自分の思うようにはなりません。

事にのぞみ慌てて判断をあやまらないように、目前の利害、得失だけで出処進退を決めると将来後悔するようなこととなります。自分の位置、周囲の状況をよく考え、出来るだけ長いスケールで対処するようにして欲しいと思います。

人生は長いのです。雨、雲りの後には必ず晴天が来ることを信じ、肩の力を抜いて、ゆっくり腰をすえ、来るべき好機に備えて自重される事を望んでやみません。

## 五三會コンペ作品募集

1. 課題：郊外(中心地より5~10km圏内)に建つ低層集合住宅
    1. 規模——30戸~50戸を1ブロックとする(ブロック数は自由)
      - 一戸当たり100㎡以下とする(庭・バルコニーを含む)
    2. 敷地——自由設定
  2. 提出図面……平面図・配置図・断面図・その他設計意図を表現する図面
  3. 用紙……ケント紙(A-1)2枚以内
  4. 期限……昭和50年10月10日〆切
  5. 提出先……佐伯郡五日市町三宅・広島工業大学菅原研究室
  6. その他……対象は学生および卒業生(賞品は1.2.3.席その他若干数)
- 審査方法・発表方法は次号により、又作品の返却は原則としてしない。

# ○今春卒業予定者の就職先

先輩の方々、下記の新会員が社会に飛び立ちますのでよろしく御指導をお願いいたします。

氏名	就職先	氏名	就職先
相川 昌文	東京建設設計	浜井 良治	東京建設
秋田 邦晴	工業高等専門学校	林 憲和	東京建設
足達 隆史	和村組	平石 武志	和村組
安部 弘	三菱ホーム	平川 長義	高岡土庫
池本 裕隆	東京精工工業	平田 美明	東京建設
石橋 弘司	上野建設	藤井 信敏	三井建設工業
上野 聡子	清水建設	藤村 俊和	三井建設
板野 修一	和村組	横 泰明	三井建設
伊藤 正一	下野建設	益田 博	サトウ工業
井上 務	大塚組(大塚)	松田 俊一郎	建設設計(大塚)
内海 克彦	大塚組(大塚)	三木 晃	建設設計(大塚)
大橋 一三	和村組	光田 龍彦	和村組
大畠 耕司	和村組	三原 厚	三井建設
沖 範明	三井建設	迎川 和康	三井建設
越智 久文	三井建設	桃枝 幹太	建設設計(大塚)
越智 克正	三井建設	森迫 博史	建設設計(大塚)
越智 邦彦	三井建設	山岡 寛	建設設計(大塚)
上田 忠司	三井建設	山田 雅史	建設設計(大塚)
菅 正清	三井建設	山崎 政文	建設設計(大塚)
北地 範久	三井建設	山田 成将	建設設計(大塚)
義野 秀八	三井建設	山本 富雄	建設設計(大塚)
栗栖 朗郎	三井建設	山田 正視	建設設計(大塚)
大池 幸生	三井建設	荒谷 修生	建設設計(大塚)
小川 清	三井建設	岩谷 耕	建設設計(大塚)
高畑 和春	三井建設	神垣 茂則	建設設計(大塚)
古藤 政人	三井建設	齊藤 竜典	建設設計(大塚)
小林 博之	三井建設	田原 純二	建設設計(大塚)
小森 厚	三井建設	寺川 和成	建設設計(大塚)
近藤 博	三井建設	富井 孝明	建設設計(大塚)
財津 幸範	三井建設	福田 寿文	建設設計(大塚)
崎野 哲生	三井建設	吉田 正幸	建設設計(大塚)
重原 信明	三井建設	津田 真悟	建設設計(大塚)
正原 卓己	三井建設	村上 義実	建設設計(大塚)
白石 孝夫	三井建設	大西 君明	建設設計(大塚)
菅 邦男	三井建設	三輪 照雄	建設設計(大塚)
鈴木善次郎	三井建設	新宅 芳之	建設設計(大塚)
平 誠自	三井建設	門井 裕昭	建設設計(大塚)
田尾 則彦	三井建設	三谷 良隆	建設設計(大塚)
高島 正雄	三井建設	田村 範雄	建設設計(大塚)
高森 啓壮	三井建設	峠広 誠	建設設計(大塚)
田口 直樹	三井建設	串井 武憲	建設設計(大塚)
竹保 博史	三井建設	岩井 勝信	建設設計(大塚)
多治見正則	三井建設	上野 昭宏	建設設計(大塚)
田中 信治	三井建設	麻植 太郎	建設設計(大塚)
田村敬次郎	三井建設	木村 寿史	建設設計(大塚)
且 義広	三井建設	武智 博	建設設計(大塚)
津田 靖文	三井建設	田中 正成	建設設計(大塚)
土居 一憲	三井建設	波多 定行	建設設計(大塚)
中岡 昇	三井建設	樋口 正義	建設設計(大塚)
中本 秀之	三井建設	藤沢登貴子	建設設計(大塚)
西川 誠司	三井建設	相良 賢	建設設計(大塚)
新山 政美	三井建設	田頭 正幸	建設設計(大塚)
沼田 幸生	三井建設		
橋本三千夫	三井建設		

森田 博行	三井建設	中原 英明	三井建設
加門 健悟	三井建設	中村 良一	三井建設
渡部 寛	三井建設	仲山 正夫	三井建設
和田 正五	三井建設	西岡 一成	三井建設
寺内 徳幸	三井建設	錦田 一成	三井建設
堀向 英伸	三井建設	西原 久猛	三井建設
山内 繁	三井建設	西宮 善幸	三井建設
遠上 憲治	三井建設	橋本 昌之	三井建設
折田 栄三	三井建設	畑 幸成	三井建設
秋嶋 英輔	三井建設	原 尚	三井建設
穂吉 修次	三井建設	平井 敏明	三井建設
阿部 忠明	三井建設	平岡 勝己	三井建設
荒川 隆夫	三井建設	広田 耕三	三井建設
池内 一寿	三井建設	弘中 義則	三井建設
石井 豪	三井建設	藤岡 薫	三井建設
板倉 敏明	三井建設	古田 隆重	三井建設
伊丹 香	三井建設	本田 正剛	三井建設
今井 邦郎	三井建設	松岡 弘文	三井建設
大下 芳生	三井建設	真鍋 義広	三井建設
大土井 浩二	三井建設	丸山 豊	三井建設
大橋 孝一	三井建設	三島 重昭	三井建設
沖田 政範	三井建設	宮川 謙吉	三井建設
尾崎 和雄	三井建設	森岡 弘憲	三井建設
越智 省二	三井建設	森谷 幸子	三井建設
片山 勉	三井建設	柳本 晴隆	三井建設
川島 秀夫	三井建設	山崎 和彦	三井建設
神田 孝一	三井建設	山田 輝男	三井建設
清野 泰志	三井建設	山口 辰夫	三井建設
国信 彰利	三井建設	山田 義夫	三井建設
倉橋 陽介	三井建設	山本 好考	三井建設
栗本 高志	三井建設	若松 龍二	三井建設
桑田 雅史	三井建設	池田 考弘	三井建設
古賀 敏彦	三井建設	泉 清章	三井建設
小迫 昭三	三井建設	岩井 良王	三井建設
合田 稔	三井建設	北岡 徹雄	三井建設
小島 好登	三井建設	田中 学	三井建設
小松 俊一	三井建設	菅 正樹	三井建設
近藤 繁利	三井建設	中森 慎治	三井建設
迫田美喜男	三井建設	渡田 充寛	三井建設
佐藤 一政	三井建設	前田 昭	三井建設
佐藤 宜之	三井建設	井元 充仁	三井建設
篠永 昌幸	三井建設	新居田 至	三井建設
島本 和男	三井建設	西岡 清貴	三井建設
下田 卓夫	三井建設	平尾 俊雄	三井建設
菅 隆二	三井建設	島川 滋	三井建設
峠 智城	三井建設	石井 勝則	三井建設
高須 賀	三井建設	上野 裕	三井建設
滝口 和明	三井建設	亀田 幸信	三井建設
竹内 希	三井建設	川原 寛	三井建設
田中 和彦	三井建設	木下 道夫	三井建設
谷 清司	三井建設	小松万三利	三井建設
千田 博之	三井建設	新谷 博文	三井建設
綱本 雅義	三井建設	藤井 康	三井建設
土井 健一	三井建設	向井 竜吉	三井建設
土肥 正志	三井建設	免出 晴久	三井建設
富岡 康文	三井建設	森園 正	三井建設
永岡 安晴	三井建設	山内 文男	三井建設
中川 隆広	三井建設	山本 茂男	三井建設
仲島 隆幸	三井建設	上之 博文	三井建設
		西山 正剛	三井建設

渡辺 正和	富沢 寛人	野中 建彦
太田 英範	玉井 康雄	
高橋 良造	大起建設	木下 雅嗣
内田 憲		村田相互設計
藤原 節夫	大久保繁博	大起建設
	木本 周二	広専

#### 4 9 年度会費納入お済みですか？

早くネ！

“7ページを見よう”

総会で逢おうデ！

5月11日

## 黒川紀章氏の講演から

11月9日(土)、母校において「現代建築と都市計画の方向」という題目で黒川紀章氏による講演会が催された。「五三会」においては、建築学科への援助という型をとり、講演を共催する型をとった。同窓生も多く来校され、聴講されたものである。黒川氏は日本の建築家の第1人者であり、設計事務所をもち、又社会工学研究所の所長でもあられ、世界をまたに活躍されておられ、講演を聴講した学生・同窓生には大変勉強になったことと予想されるものである。黒川氏の講演の内容を私なりに聴講できなかった同窓生に簡単にお知らせしようと思います。

講演の中心になったのは「円の理論(中間体)」ということであり、色々な事柄を引用され説明された。そして、もう一つは氏の設計された建物をスライドを見ながら考え方を説明されたものである。

そこで「中間体」ということを少し説明してみます。私の理解力が之しく間違いでありましたら講演を聴講された同窓生に修正をお願いいたします。

中間体とはニュートン力学等という、月とか地球とかの間の無の空間であり、月や地球以外の中間部分と考えられるもので、家(建物)で考えるなら、居間とか食堂、個室等でなく、それらを結ぶところの動線部分を指すものである。これらの中間体を重視しなければいけなく、実体化の努力を必要とするのではないか、日本の伝統的な建物においては、縁側にウェートがかけられている。縁側は空気や風景を建物の内に取り込む役割を果たす中間体である。

都市においてもそうである。ヨーロッパには広場があり道がなく、日本には広場はないが道はあると言われるが

日本の(京都等に多い)道(ロジ)は交通ではなく、生活空間であり、個人の空間の都市生活への延長である中間体なのである。

都市とは大きな建築と考えられ、建築とは都市の一部ではなく、小さい都市であるという発想をもち建築設計も都市計画も中間体を重視し計画してゆく必要がある。

なぜ、そんなに中間体が重要であるかを黒川氏はいろんな例から話された訳であり、不連続な変化や急激な変化はいけない。何においても連続していなければならぬわけで、それは中間体を介して連続しており又中間体を介して連続させて不連続を排しようという考えのようである。

又機会あれば、講演会を催すことも意義のあることで、努力いたしたく考えております。

## 近況 “我が母校”



### 新 2 号 館

(土木工学科と建築学科の、研究室・実験室)

### 新任教師紹介

教授 林 公重

〈土質力学、建築測量担当〉

### 建 築 学 科

学生数(49年12月現在)

4年 ①116 ②112 228

3年 ①136 ②140 276

2年 ①118 ②122 240

1年 ①119 ②120 239

計973名

工大学生数 3・730名

## 「五三会」広島市役所支部結成

44年卒 知野吉春

早いもので、私は6年前学生の気持を捨て切れぬままに役所に入りました。勿論その当時は、母校の先輩達がいるわけではなく、毎日毎日心細い気持で勤めていました。御承知の如く役所のシステムは縦に厚く横に薄い伝統的システムの為に練れにくい所です。しかし今言った事は事務系の職場が主で、我々の様な技術系の職場に於ては、かなり横の関係が厚い所だと私は思う。又役所というシステムでの事務は、受動的な面が過半をしめ、各職場の職員も机での事務がほとんどといって過言ではないと思う。私の現在所属している建築審査課も例外でなく、むしろ代表的受動的な事務だと思います。こういった中で職員の精神面は、かなり弱っていると思います。そのために役所には互助会というシステムが有り、庁内での体育祭、その他のリクリエーション等の企画を組んで職員の精神的面の改善に一役かっています。

さて我々母校のOBも現在20名になりました。これからも多くの後輩達が入ってくると思います、昨年(48年5月)には「五三会」も結成されこれから会員相互の新睦も増すことだろうと思う。しかしこの「五三会」も多勢になるにつれてその運営が困難になると思う。その解決の一手段として各々の職場で支部的なものを結成し、各支部の結束をより強くすることによって、本部「五三会」のより発展が望めると思います。我々市役所支部の結成動機としては、今言ったことも一因では有りますが、もう一つの要因は、市役所という大きな組織の中での我々OBの使命とか、自分というものの存在価値を、支部の仲間同士が話し合い、早くその目的達成のための仕事を身につけるために、支部を結成しました。大きな目的の様な気はしますが、これから先の後輩達のためにもこの組織を皆んなの力でより強く結束し、後輩達に早く職場の分園気のみ込ませてやりたいと思います。

最後に本年度卒業される諸君の社会での健闘を期待したいと思います。

一初心忘れず、苦勞を味わいなさい一

## 卒業して6年目

45年卒 勝田民夫

最初に皆様におわびしたいことがあります、それは私の場合、サラリーマンといっても、普通の会社や官庁のサラリーマンとちがって、設計事務所の一社員であるからであ

るため、設計事務所以外のことは、話には聞いているけれども、まったく知らないのである。

さて広島工業大学の建築学科を卒業したのは昭和45年つまり2期生である。卒業後すでに、5年もすぎ、6年目である。「石の上にも3年」とただ、がむしゃらにやってきましたが、この3年の2倍の6年目である。

広島工業大学の建築学科は、出来てまだ新しいために、就職先も、いい所はなく、地元の業者がほとんどであった。卒業する時も、先輩があとからどンドン出ていくので、広島工大のイメージダウンをさせないようにということであった、設計事務所に入社しても、先輩はおらず後輩のためにはがんばらなければと、ただそれだけであった。前置きはこれぐらいにして、設計事務所に入社してみると、毎日の仕事が全て、物めずらしさと同時に、自分の与えられた仕事を期限内にいかに行かせるかと言うことばかりである、実際ひまを見つけて勉強するなどと言うことはまったく出来ない、ここで感じたことは、学校で勉強したことのほとんどが、まったく役に立たないということであるこれには、ほとほとまいってしまった、ある程度、仕事をおぼえ、時間も取れる様になったのは入社後半年すぎである、勉強しようと思ひ人の書いた図面等を見たり自分なりに考えたりした、設計事務所という所は、人に教えてもらおうとしても決して教えてくれないのであるすべて自分で勉強し、人の良い所を自分なりに解釈して、自分の物にして行くのである、人に教えてもらえないといつても(全てそうではないが)時には期日がなく、ノイローゼになることもたびたびあった、しかし、すべて原点にもどって、最初から、やりなおす気持で勉強すれば、どうにかやって生けるものである、今、考えてみると、原点にもどって勉強すると言うことは、ひじょうに良かったと思っている、また、自分の得意な物、たとえば、法規であるとか、図面においても同じであるが、人にはまけない物を一つでいいから持つことは大事であると思う。

いろいろ、なまいきなことを書いたけれども、6年目になって、やっと、建築のケの字までわかった様な気がする、まだまだ勉強することもたくさんあり、ますます、がんばらなければならないと思っている。最後に人にたよらず、自分で勉強しながら、1つ1つ身に付けて行きたい。

## 昭和50年自分の立つ位置を知ろう

四年 佐藤宜之

「最近の若者はなっちゃおらん。我々が若いころは、認識が第一であり、それから行動に移った。しかし、最近の若者は行動が先にくる。私は犬が好きで一緒に生活しているが、犬でさえ自分が何を欲しているか明確に認識し、そ

の認識に従って行動している。ところが最近の若者は、「考えるより、行動だ」という。自分が何を欲しているかが明確でない奴は、犬にも劣る無知な人間だ。」

寒風の吹き抜ける夜、体の中から暖まろうと立ち寄った赤提燈で燐り合わせた老人に、私は説教された。その長老は、薄くなった髪をなぜ、アルコールのせいかな、かなり唇がもつれながら、一学問をするということは、自然法則を発見することであり、その結果、自分というものの宇宙における位置を知ることである。そういう位置の認識が人間の力の根源であり、それを知らずに、闇にも動いたところで、沼に石を投げるようなもので、何も生まれはしない。一と言うのである。

私はこの長老のことは聞き、ふと我が身を振り返らざるを得なかった。高度成長経済の波に乗り、使い捨ての文化を謳歌した時代に成長した私は、この激動の昭和50年に、私の立つ位置を認識し、行動に移ろうとしているだろうか。

私達が成長した時代とは異った、新しい認識を必要とする時代がすでに始まっている。いままでの日本にとって、経済合理性は都合のよいように作用してきた。しかし、今後は、その支配が逆流する時代であろう。経済合理性という流れに乗って舟が動いている時と、流れにさからって川上に向って悼さす時代とは、まったく違う認識を必要とする。私達若者が、逆流に悼さす認識力とエネルギーを持たねばならない時代に突入した。そして、新しい時代を認識するには、古めかしい権威を打ち破り、新しい思想と、自由な発想をもって、昭和50年の、自分が掲げて立っている構造、骨格を認識し、大なるエネルギーをもって、行動へと移って行かねばならない。

\*\*\*\*\*

## 建築サークルの存在

建築サークルというのは、学生だけでプランニングをし、図面・模型というように創作活動も行っています。そして最終の目的は、短期間での製作、及び大学祭における展示・バザーなどを目的として、今までやってきました。

サークルには、都市計画・海上都市・集合住宅・独立住宅などがありました。これらも学生だけで考え、創り、展示などをしてきました。昨年の展示は、地井研・佐藤立美ゼミ・西川ゼミ・建築サークルで、内容は、地井研一逆格差論、立美ゼミ一光弾性の実験、及び実演、西川ゼミ一井ノ口の理立地、建築サークル一黒川紀章でした。

そして、我々が五～六年ぐらい続いています、これからもこのようなグループ存続、及び創っていきたくと思っていますが、なにしろ我々が三年で、四年になると、サークル活動をやっていけないので、一、二年になるべくやってほしいと、願っています。ですからぜひやってみようと思う人達は、ぜひいまのうちに、学生の特権、及び自由をおおいに発揮してください。そして、このような活動は、学校で学ぶもの以外のもの、模型の造り方、及び上級生、下級生との縦の継がり（コミュニケーション）などができ、有意義でよいと思います。若い一、二年生よ!!バチンコや、マージャン、女などに労力を使うのもよいが、少しは若いエネルギーを、このような活動にむけてみたらどうですか、四年間はすぐ終わりますよ、だからいまのうちに、サークル活動で思い切り頑張ってみようではないか、一・二年生達よ!!

——サークルの一員より 謝辞——

ここでこの機会をおかりして、五三會へのお礼を申し上げます。

第十三回の大学祭においては、建築実行委員会への援助、ありがとうございます。そして援助や、その他の人達の協力で、大学祭は成功のうちに終わりました。これからも昨年同様、より一層の協力や援助をお願いいたします。

同窓生の人達が暇があれば、サークルや学生へのアドバイスなどをお願いいたします。

また五三會と、建築学生との交流を持ち、何かやってみたらどうでしょうか?具体的に提案すれば、競技設計とか・各分野、およびその他の人々の講演などです。競技設計の目的としては、大学祭における展示です。これには何か賞品を出すようにしたら?、そして同窓生の中で今までに設計したものがあれば、これらも展示したらどうでしょうか。我々在校生にとって、何かつかめるのではないかと考えてみたりしています。たとえば先輩からの就職のアドバイス(現場、設計、管理など、各分野の方からの、経験談、失敗談などの話)を、サークルを訪問してもらって話をしてもらおうと、これからの就職において何かの参考になるとと思います。

最後に、サークル活動をやってみようと思われる人は、一度やってみてください、やるか、やらないかは、一度やってみて判断をしてみてもおそくはないと思います。学生時代何もしないで遊ぶよりも、このようなサークルに入って活動したら、何か良い思い出、経験、およびその他のものがつかめると、固く確信しています。我こそという人は、どうぞ来てみてください。

連絡先は、佐藤洋研究室の杉田のところまで。早くしてください。よろしく願います。

## “七年目の漂流”

造設計集団A A 設計室  
44年卒 中 塚 晴 夫

卒業してから6年の歳月が過ぎ、今7年目、流れが私を何処へか運んでゆこうとしている。6年間の迷える航跡は、はなはだ心もとないもので、その終止符を打つ。主体性を持ち合わせた漂流者を意図する私にとっては、6年間の航海から学んだ知識も、知恵も、残念ながら失望に値する程度にしかなかったようだ。現在、伴に漂流する二人の同期の人達も、船出して以来同じ迷える航路をたどって来た。最初の2年間は、親船の後を見失なうまいとして必死になって追いかけても、なお遠き存在であった。振り返ってみると、厳しい中にも意味深い航海として、私達の思い出の中に生きる。泳ぐ事を子に教える方法として、船から海中に突き落とし、必要以上に海水の体内への流入を防ぐ術も知らず、本能に近い能力で岸にたどり着く子に対する親の情愛表現に似ていたようだった。それも、ほんの数メートルを冷静に客観視出来る立場と、絶望に近い無限への飛躍へと投げ出された立場との一方的な対話なのであるが、凡子は応々にして、その渦中に在る時は、真意を判断出来ずに親を怨むものだが、それも親船を離れて、非力なる4年の漂流は、逆にその意味を学ぶ結果となった。若き漂流者達は、自我の想念の対立の為激して自己固有の真理に支えられた主張を退げけなかったり、又時には黙して自己の殻に団じ込み相手を見捨てる事によって自己の優位性を誇示したりする。私達3人の漂流者も若き情熱に駆られて、3つの筏を意図した事も幾度かあった。時の流れに身を委ねる事は、時として若き想念の限界を教え、真に立ち向かう目標を示唆してくれる事がある。漂流とは、否定の上に立った、創造への旅として定義したい。現在への否定、歴史への否定それは、自己へのこの上なき否定である事は言うまでもない。があえてそれを余儀無くさせる段階に立ち到れば躊躇なく、一步前進すべきであろう。否定する事は同時に、それに変わる新しき創造が成されてゆかなければ、単に自我への埋没として終わってしまう事を知っておかねばならない。広島広域都市圏へと拡大する事が、必要不可欠な状況であるのなら住民が主体となった各分野の参画も積極的に行なわれるべきであろう。だが現在展開されている都市圏への拡大作業には何か欠落している。実現への必要性から来る諸矛盾の露呈過程は陣痛にも似た苦しみであろう。がそれは健全なる新生児への期待に支えられたものである。進行しつつある都市形態は同時的に幾多の弊害をも深刻な疎外状況として生み出している。毎日と言って良い程に利用する高速道路は今や都市内部に深く進入して来ている。時

速2kmと時速50km80kmとが近接した場合その摩擦による衝撃波はどのような波紋を生じるのであろうか。広島にみられる、高速道路の景観はそれを如実に語ってしてくれる。それは東京とも名古屋大阪とも違った意味を持つように思われる。都市に於ける流通網として幹線道路を動脈として見るならそこから送られてくる血液によって成長しつつ又同時に動脈を支えてゆく細胞群として住居群がある。いずれか一方が不健全であれば当然他も感染してゆく。ここで健康体としての基準が問題になってくる。と同時にその位置関係がいかに不幸であるかを幾多の悲しき事実が叫び声を上げ、又あらゆる分野の知識人が警告を発している事を忘れてはいけない。

幾多の先人が残した科学的又技術的所産は一体誰の所有物なのであろうか。それが真理への追求社会への加刺性追求の為に成されたとしても人による人の為の社会という前提を置く以上我々全ての人達の財産でなければならない。その財産である科学技術的所産は、我々の意図とは裏腹に今や独立した存在と化し我々創造主を疎外し断頭台へと追い込もうとしている。その原因を現在社会を形成している我々全ての人々が先人の残した財産の管理を怠りその使い道を誤った事に見い出そうとするのは片寄った見方であらうか。

技術が、社会のある疎外状況からの解放の為に必要とされる存在であるのなら現在のように解決する事によってより新しいしかも破壊的疎外状況を誕生さす事は大きな誤りではなろうか。

今や内外部に於いて技術者は告発されるべき存在として浮かび上がってきた。がそれは、同時に、技術というメスを最も必要としている証しでもある。それも誰か特定個人のものではなく我々住民全ての財産としての技術の参画が待たれている。

技術者の最大なる欠如意識は自己の形態的技術に埋没しがちな事だ。防止策の一つとして私は自己の日常性への技術の引き降ろしを意識する事があると思う。

技術は、誰の所有物でも武器でもない、我々みんなが使い得る道具であり手段でなければならない。何んだか、眠覚めの悪い夢を見た感じがするようだが、そうこうしている間にも時は我々を何処へかと運んでゆく。願わくば何時の日にか宝島を発見したいものです。

## 雑 感

45年卒 小 田 正 志

同窓生のみなさんいかがお過ごしでしょうか。早いもので、社会に出てもう5年が来ようとしています。先日私の

体験を書くようにと言われ、何を書こうかと迷ったのですが、入社してから今までに感じた事について少し、述べてみたいと思います。

私の会社は、建鉄工業と云って、鉄骨を主体として、工場倉庫を専門に建築する会社であります。学生時代に縁の薄かった、鉄骨と取り組む事になり、最初の2年間は、現寸、工場加工を覚えるため、工場に入り、見よう見まめで覚えました。3年目から、現場を任かされて現在に至っているわけです。工場、現場を経験して、学生時代の受業を、ふり返って見ますと、建築計画、設計に重点が置かれていたように思えてなりません。もっと施工に力をいでもらい、是非、実習も組み入れてもらいたいと願うするしだいであり、特に、近年は、鉄骨構造の全盛時代でありますので、鉄骨の理論、構造計算現寸、溶接等を十分に習得していただきたいと思ひます。それによって、社会に出たときに、苦勞、色々な疑問も少なくなると思ひます。また私は、将棋、碁、マージャンを推選いたします。これからは、人間関係をつくる上で、大変有効であり、得意先、会社で、大変役に立つものであります。最後に同窓生諸氏の御健闘を御祈り申し上げます。

## おんな カトウ建築設計 45年卒 加藤 恵子

むかしから、おんなの定義として、貞節、内助、奥ゆかしさ、しとやかさといった陰の表現が多く、おとこに伍して工業を志望することなど、思いもよらぬかわり者だと考えられたようです。

わたしが、おんなの園から工業大学の建築を志望した頃、祖父が笑いながら「おんなの大工になりたいのか」と言いましたが田舎では、まことに奇異な子供と受け取られたようです。

その日、わたしには専門的備えもないままに、学園の坂を登っていきました。桜のつぼみはまだかたく、雲間がぐれに薄い陽がこぼれて、あちこちの日だまりに頬よせあつて、三々五々試験を待っていました。

首尾よく入学して、4年の歳月を学窓で修練し、螢雪の功あつて社会人となることができました。当時は超高層ビルラッシュで、空高く雲つく足場に、設計図片手にした英姿を夢見たものです。

しかし、おんなのたどる道はただひとつ、同窓の夫に嫁し、一児の母となるに及んで、あの頃の勇ましさをなつかしく憶んでいる昨今です。

石油ショックが引金で、世界中大恐慌の渦中にありながら、オシドリ建築士の特技を生かして、喧々ごうごう右だ左だとなりあつて、新しいアイデアの開拓につとめており

ます。実利実益はなくとも、この道は生涯にわたる勉強の道であると信じ、互いに切磋していることは、おなじ学園の道を経た者のよろこびであります。

大学合格者の名簿が、例年新聞紙上に発表されますが、何人かのおんなが名前を連ねているのをたのもしく感慨ふかく見るとともに、このひと達に幸多かれと祈ります。ものずきだけではとても工業大学の門はくぐれません、固い信念とやさしい心、強い体力と秀でた学力を備えてこそ、女性建築士として世の脚光を浴び大成できるものと信じます。

母校は、そのむかし田園の彼方の丘の上に、白亜の美しい姿を浮べていましたが、いまは、たちならんだ屋並みの奥にわずかばかり見えがくれしています。なつかしい学園のたたずまいにも時代のながれは変化を与えます。

74年の歳も残り少なくなったいま、わたしの机の上に「五三会報」があります、インキも新しく8ページの紙面がみずみずしく感じられます。先生のおことばに慈愛のまなざしを愧び、卒業生の立派な意見に深い成長のあとを感じます。諸案内は遠ざかった学園との距離をちじめてくれました、諸先生のご盛昌を祈り、諸先輩、同窓の諸君のご多幸をこころから念じます。

## 会員へのお知らせ

### ◎ 会費納入のお願い

建築学科卒業生全ての会でありますので会費を納入されてない方一日も早く送金下さいませよう。

なお 入会金は千円 年間会費は千円です。

郵便局の口座番号は 広島 **28276**

### ◎ 卒業生の住所録を整備しよう

住所録を整備すべく努力をしておりますので会員・同窓生の皆様からの連絡をお願いいたします。

返信用のハガキは必ずポストへ!

### ◎ 種々の情報をお知らせ下さい。

「五三会の会報において種々のコーナーを設けてゆきたく考えておりますので、職場でのこと又友人の情報、思いついた事なんでもけっこうです。写真等もけっこうです。ハガキでも手紙でも御一報下さい。

会報にのせ会員にお知らせします。

## 第1回総会報告

49年5月12日(日)に「五三会」の第1回目の総会が共済会館において催された。

菅原会長による挨拶から始まり曾根田先生(顧問)の挨拶



擧・議長選出という運びで、48年度の活動報告・49年度活動方針へと進んで行った、今回は最初の総会であった為、会の創立に努力された菅原会長より会則の説明等も行なわれ、48年度会計報告も無事承認され、49年の新役員を前役員の方で承認され、49年度の活動方針、予算案等も全員賛同により認められ、菅原会長、青木、秋本副会長等をもってスタートすることになった。

その後、母校の先生方となごやかに懇親会が催されたしだいである。

要点をメモしてみると以下のようにはる。

会則 2条の本部は一応菅原研究室に置く。

5条の準会員（在學生）については本会が充実した時点で検討する。

49年度活動方針

「地球は家族だ」建築を通して地域社会に貢献しよう。

○会員名簿作成の準備を行なう。

○会報発行

○同窓生と在學生との連帯を強める。

（援助・講演会・コンペ等を行なう）

○支部結成への努力を行なう。

地域支部（東京・大阪・四国等）

職場支部

48年度決算報告

◎ 収入	
○会費	183,175円
○広告料	195,000円
計	378,175円

◎ 支出	
印刷 {会報2回 封筒 総会案内}	167,800円
郵送料切手	28,320円
あて名費バイト料	16,000円
印かん	38,100円
会議費	28,000円
消耗品	2,750円
計	294,970円
49年度へくり越し金	83,205円

49年度予算

◎ 収入	718,000円
◎ 支出	
印刷	270,000円
郵送料	60,000円
バイト料	20,000円
会議費	50,000円
在學生援助	20,000円

コンペ	30,000円
総会負担	30,000円
雑費	20,000円
計	510,000円

総会・懇親会案内

- 日時 5月11日（日曜日）
  - ・ 総会 3時～
  - ・ 懇親会 4時30分～
- 場所 鯉城会館
 

広島市大芝2丁目15-16  
Tel 27-0124
- 会費 3千円
 

（年間会費等と一緒に送金して下さい）

  - ※ 会場の都合により、出欠を4月29日までに締切りますので早く出欠ハガキを返信し、振込んで下さい。
  - ※ 入会金・千円 年間会費・千円等も同時に振込んで下さい。

会場案内図





